6. 肩甲骨側面の簡易撮影法

A simple radiography for scapula Y view

横浜市立大学医学部附属浦舟病院 中央放射線部

O三浦 隆

(Takashi Miura)

石川栄二

(Eiji Ishikawa)

米田 靖

(Yasushi Yoneda)

村山茂康

(Shigeyasu Murayama)

早勢英俊

(Hidetoshi Hayase)

佐々木稔

(Minoru Sasaki)

【目的】

肩甲骨側面撮影は、肩甲棘三角と肩峰前縁を結んだ線（以下、「体表指標線」と言う。）をフィルム面に垂直とした方法で行っている^{*1}。しかし、この方法では、被検者の体型等諸因子や、技師の経験差によって、整位の基準となる点の触知が困難なことがある。そこで今回、われわれは、肩甲骨で最も触知しやすい肩甲棘に注目し、体表より簡単に整位できる撮影法を検討したので報告する。

【方法】

成人肩甲骨解剖標本（41体82個）を尾頭方向に撮影したX線写真（写真1）より、図1の体表指標線：aと肩甲棘三角を始点とした肩甲棘内側直線部分の延長線：b（以下、「整位基準線」と言う。）とのなす角度 θ を計測した。この角度より、aをフィルム面に垂直とした時のbとフィルム面との角度を求め、これを整位角度とした。

【結果】

計測した角度 θ は、 $23^\circ \pm 3^\circ$ であった（表1）。よって、フィルム面と整位基準線とのなす角度は、 113° となった（図2）。この角度による実際の整位を写真2に示す。

【写真1】肩甲骨解剖標本

【図1】計測ポイント

【表1】 aとbとのなす角度 θ

$$= 23^\circ \pm 3^\circ \quad (92\%)$$

【図2】肩甲骨側面撮影のシェーマ

【まとめ】

この 113° を利用した簡易法は、被検者の肥満、筋肉体質、肩甲骨部痛等に関係なく、また技師の経験にも影響されずに肩甲骨側面撮影ができる。

今後、この簡易法と既報の撮影法を被検者の個体差別に使い分け、または併用し、精度の高い肩甲骨側面撮影にしたいと思う。

*1 1976年第23回関東・東京部会 村山、天内ら

【写真2】実際の整位